



P53 signature

「卵巣癌：初期像」

院長 西 田 敬

細胞の活動や寿命を制御している遺伝子がP53遺伝子。変調を来すと細胞は寿命を忘れる。不死になる。詰り、癌化する。変異p53の発現は癌化の前触れ歟。

抑々、素となる可き外分泌腺を欠くにも拘らず、悪性卵巣腫瘍の90%は腺癌である事が不可思議。然らば、この腺癌は卵巣の何処から発生したもの歟。病理組織や組織発生を基盤とした腫瘍分類で知られるWHOが卵巣癌発生についても、説明責任を負う。1973年に発表されて以来、若干の改訂を加え乍、今日に至っている。頻度80%以上の漿液性腺癌を含む上皮性腫瘍群も当初はcommon epithelial tumoursで一括りに纏められた。日常的に、英語に馴染の薄い輩には未だいくばくかの違和感が残る、坐り心地の良くない表現。この腫瘍群は臈て、表層上皮性・間質性腫瘍 (surface epithelial-stromal tumours) と組織発生に忠実な表現となり、まずは重畳、一段落。ところが、2014年に刊行された新しいWHO分類では卵巣腺癌のcaptionそのもの

が放逐され、単に上皮性腫瘍 (epithelial tumours) とのみ表現。これ以降、卵巣腺癌は卵巣原発とは限らない旨、記した積りだったの歟。

処で、Angelina Jolieは変異BRCA遺伝子のキャリアーで、女優の絶頂期を前に乳癌のリスク低減手術 (risk reducing surgery: RRS) を受けた事は未だ、耳目に新しい。癌が発症する前に、危険性が高い当該組織を予め除去しておく手段で、解明が進んで来た遺伝子医学の賜物。扱、卵巣癌でのRRS

(危険因子低減手術) を如何する歟。表層上皮性腫瘍とは云うものの、卵巣の漿膜が徐々に癌化して行く様子を具に観察した記録はない。この腫瘍群の表題 (caption) が消え、単に上皮性腫瘍だけに為ったのも宜なる哉。その上、厄介なことには、女性の腹膜は卵管や子宮の成分に分化する傾向が強い。曰く、卵管内膜症 (endosalpingiosis)、子宮内膜症 (endometriosis)、そして頸管内膜症 (endocervicosis)。

この性格から、総じて二次的ミュラー氏管システム (Secondary müllerian system: Lauchlan S C, 1972) とも呼ばれる。卵巣癌と云っても、卵管原発癌や隣接する骨盤腹膜由来を否定できなくなった。茲で改めて自問する。Angelina Jolieに施行したRRS (リスク低減手術) が卵巣癌を、果して有効裡に防禦できるのであろう歟。自答する。否。卵管の予防的切除では不十分であろう。冒頭に骨盤腹膜に見られた変異p53遺伝子の発現を示したが、卵管はsecondary müllerian systemを除けば、最も懸念される卵巣上皮性癌の発生母地の候補に過ぎない。

